

ある車窓風景

二十七回生 萩原 直大

昭和十八年生まれの私にとって、思い出が残る四歳頃には、戦争そのものは完全に終わっており、空襲や防空壕へ逃れた経験など、全く覚えておりません。私に戦争の痕跡がないのには幸運な3つの理由があります。

- ① 千里山が爆撃されたことはなく、そのため戦争の傷跡を見ることがなかった。
- ② 昭和19年、父は召集令状が来て戦地に赴いたが、終戦の年の9月に帰宅。会社も以前のままでのところに復帰できたから、人並みの生活ができた。戦争で亡くなった親戚はいたが、千里山で暮らす両親と我々兄弟は全て無事であった。
- ③ お粗末な衣食住、停電、全てのものが不足した日常生活であったが、我々18年生まれにとっては、最初からそうであった。

そんな私の心に残る戦争の傷跡の一つは、天王寺動物園に行った折に乗った大阪環状線の森ノ宮―玉造一帯に広がった車窓風景です。

千里山会・会員の方に説明する必要はないでしょう

が、大阪砲兵工廠の跡地です。

小松左京のSF小説「日本アパッチ族」でさらに全国的に有名となりました。

8月14日、連合軍というよりは米軍が、B29爆撃機約150機を投入し、1トン爆弾843発を投下し、徹底的に破壊しつくした跡です。

ここは寝屋川の暴れ河川敷であり、軟らかな地盤であったため、不発弾として地下10mにまで残り、昭和40年代初めまで、復興・開発が遅れた。その時まで、「戦争」がそのまま車窓風景として残りました。

「府庁も、大阪城も、放送局も焼け残っていたが、砲兵工廠は、見渡す限り赤茶け、ねじ曲った鉄骨の山になっていた」小松左京が昭和61年、大阪ビジネスパークのオープン記念誌に寄せた言葉です。

でも私の頭の中に残る光景は、そんな生易しいものではありません。多分、小松左京は全国、色々な所で戦争の傷跡を見てこられたのだろうと思います。

でも、私にとっては唯一の戦争の傷跡です。千里山で生活出来たお陰です。

でも、現実には、一家の大黒柱を、兄や弟を、夫や恋人を亡くした方も多く、戦地でやっと生き延びて帰って来てみると、内地で身内が、許婚が亡くなっていたという方もおられるでしょう。

おわり